

口語詩句賞新人賞の吉沢美香さんは、春から冬へ十句の世界を展開させながら、物事の微細な質感を掬っています。「虹消えて眼の中にある水分」「クレンジングバーム／ひんやり虫の闇」など、そこに在ることのたしかな感触たち。

奨励賞の中矢温さんは、具象と抽象の引き合いのなかにしか生まれない景色を見てくれる作者。「セブテンバー瞳のなかで混ぜる白」「帶電の身体で泳ぐあおみどり」など、フレーズの強度も十分。

白野実悠さんは、たとえば手の中の菓子ひとつから、渚やまなざしを自らの世界の当然として生み出すことができる稀有な作者。「カントリーマアムのない味を／言い合って言い尽くしてから／渚になつた」「薄荷飴みたいな俯瞰を置いていく／たとえば運動会の砂場に」など。

奥村俊哉さんは、「雪のこえ開いたままの解剖図」「コンビニは常に明るい敗戦日」などクリアな詩の立たせ方が清々しい。雪やコンビニのあかるさは、めぐりの暗さをなまなまと感じさせます。体内や戦後の暗さこそが主眼の作。

松下誠一さんは、肉声の聞こえる作品で、その親しい声のユーモアの裏側に貼りつく孤独が思索的な印象を与えています。「草原の独りをなぜ造ろうとする」「さん付けに戻してそぞぐ烏龍茶」など。造る、戻すの動詞の巧さ。

橋田純寧さんの作品は、みずみずしい表現を貫く「こちらとあちら」「すでにとまだ」の感覚。あらゆる境界線をあざやかに引き直すようです。「せんせい、かぎかっこ／閉じたくないです／あとから痛むの知ってるんでしょ」「ランダムに光るかなしみ／営みを、葬るなけれ／葬るなけれ。」など。

松浦桜香さんの作品は、安易なメタファーを拒否しつつ、やはりメタファーの力で存在の核心に触れてゆく推進を感じます。「透明な／瓶に砂糖を入れ替える／身体表現は得意ではない」「私性の不在に打つ四拍子」など。

優秀賞の江藤裕子さんの作品は、端正な詩情のなかに社会構造をときおり巻き込む刃の鋭さを潜ませています。「人類の敵」に人名麦の秋」「たくさんのみツフリーの口十二月」など、麦の重たい戦ぎ、大勢が噤む口の映像性も魅力。